

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二五年二月一日（午前）実施

国語問題

（五〇分）

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号を字数にふくむこととします。

一

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|-------------|---|-------------|---|---------------|
| ① | 新記録を樹立する。 | ② | 片時も離さない。 | ③ | 縦横無尽に動き回る。 |
| ④ | 平安時代のえまきもの。 | ⑤ | 寝ずにかんびようする。 | ⑥ | 文明のげんりゆうをたどる。 |
| ⑦ | 自然科学のりよういき。 | | | | |

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

以前、あるワークショップをおこなったとき、「2人で向かいあって、それぞれ自分のことを（私は……です）」という形式で自己紹介してください」という課題を出したことがある。参加者たちは、それぞれに「私は背が高いです」「私はひっこみ思案です」「私は学生です」「私はずぼらです」などと自分のことを説明する。

これらの説明は、たしかに「私」についての説明ではある。

1 「背が高い」のはまわりの人たちに比べてのことであり、北欧の

国などに行ったら、そうではなくなるかもしれない。「ひっこみ思案」というのも、まわりに気の合う人がいなくて、積極的に人とかかわる気になれなかったからかもしれない。「自分はこういう人間だ」というイメージは、本人固有の性質というより、まわりの他者との比較や関係においてつくられるものだ。

転校が多かった学生からこんな話を聞いたことがある。自分は、転校するたびに、勉強ができると思われたり、できないと思われたり、運動ができると思われたり、運動が苦手と思われたりした。「これが自分だ」と思っていたイメージが転校のたびにくつがえされる。おかげで、「私はだめなんだ」とか「私はこういう人間なんだ」などと自分自身のイメージを固定せずにこられた、という。

「私」は、まわりの他者との関係においてつくられる。「私は日本人だ」「私は先生だ」「私は学生だ」「私は母親だ」「私はサッカー選手だ」というのも、すべてまわりとの関係によって成立する。生徒がいなければ先生にはなれない。子がいなければ親にはなれない。そのような「私」のありかたをアイデンティティという。

A 私たちは多様な他者との関係の中で、そのときに応じて、さまざまなアイデンティティをもちながら生きている。家庭では子どもであり、学校では生徒であり、部活動ではテニス部員であり、ネット上ではなんらかのキャラクターであり……というふうに、人間関係や所属する集団に応じて複数のアイデンティティを使い分けている。

アイデンティティは自分ひとりでは成立しない。2 「オレは火星人だ」とか「私はクレオパトラの生まれ変わりです」と主張し

ても、それだけではアイデンティティにはならない。アイデンティティは、それを認めてくれる他者を必要とする。だれかひとりでも「そうですか。あなたは火星人なんです」と認めてくれれば、それはその他者との関係においてのアイデンティティになる。

認めてくれる人の数が多くなれば、アイデンティティは強固になる。アイデンティティが強固になればなるほど、孤立することへの不安や恐怖は薄まり、社会から必要とされているという安心感が得られる。それゆえ、人は他者に認めてもらいやすいキャラを演じ、それをアイデンティティにしようとする。SNSで「いいね」をもらいたいと思うのも、他者に認められることによって安心感が得られるからだ。これが承認欲求と呼ばれるものだ。

人間は孤立しては生きられない。承認欲求は、そんな人間が他者との関係を取りむすぶために発展させてきた生物学的なプログラムだ。そして強固なアイデンティティは承認欲求を満たしてくれる。

だが「認められたい」という思いが先に立つて、それに合わせたキャラに徹したり、嫌われないような役割ばかりを演じたりしていると、そのアイデンティティにとられすぎて、自分が本当はどうありたいのか、本当はなにを大切にしたいのかを見失ってしまうというリスクもある。

話は変わるが、エジプトのカイロに暮らしていたとき、町の古いエリアでザールと呼ばれる悪霊祓いの儀式があると聞き、行つてみたことがある。

場所は貧しげな古い民家だった。ごさのような敷き物の敷かれた暗い居間に三々五々、人が集まってくる。年とった女性が多いが、娘を連れた父親もいる。お茶など飲みながらみな世間話をしている。女性中心の儀礼らしい。悪霊祓いというから不気味な雰囲気을想像していたのだが、近所の寄り合いみたいであまり緊張感がない。

3 楽団が到着した。タンバリンや太鼓などさまざまな打楽器が激しいリズムで打ち鳴らされ、香炉の煙がもうもうと立ちこめる。さっきまで世間話をしていたおばあさんがつられるように立ちあがると、からだをくねらせながら、部屋の中をかけまわっていた。音楽が盛りあがるにつれて、からだを揺すったり、髪をおおっていたヒジャーブ（スカーフ）をかなぐり捨てて首を前後に激しくふったり、泣きだしたりする者も出てきた。

30分くらいごとに休憩をはさんで、音楽がくりかえされる。出入り自由のよう途中で途中から来る者もいれば、途中で帰る者もいる。タバコだけ吸って帰っていく人もいる。しかし、これのどこが悪霊祓いなのか。

カイロでうちの掃除をお願いしていたウィダードおばさんに、「ザールに行ったんだ」と話をしたら、自分も故郷のエジプト南部の町で、小さいころ、目の見えなくなった母親に連れられてザールに行ったことがある、といった。ウィダードの話によると、母親には「スーダン人」の霊が憑いていて、そのせいで目が見えなかったのだが、ザールに半年通ったら目が見えるようになったという。

「人間の中には、いろんなものがすみついているんだ。ザールをすると、そのすみついているものが喜ぶんだ」とウィダードはいった。

意外だった。すみついているものを祓うのではなく、喜ばせるのか。それでは悪霊祓いというより、悪霊のご機嫌とりではないか。

ちなみに、「スーダン人」とは現実のスーダン人ではなく、エジプト人にとって理解しがたい畏怖すべきものを「スーダン人」というイメージで象徴させているということらしい。「スーダン人」のほかにも、「白人」とか「赤い人」とか「ヨーロッパ人」といった霊もいるという。

ザールでは、自分の中にすみついている「霊」を追い出さない。映画などで見るキリスト教の悪魔祓いでは、悪魔に憑かれた人のからだから神父が悪魔を追い出そうとする。しかし、ザールはそうではない。

ザールについてのある研究によれば、女性はそれぞれに自分だけの悪霊をもっている。楽団は、その悪霊にふさわしいリズムを試行錯誤しながら探します。悪霊の気に入るリズムが見つかったら、女性は激しく踊りだしたり、泣いたり叫んだりして感情を解放する。悪霊が満足すると、本人は正気にもどり、なにこともなかったかのようにすっきりした顔で帰っていく。

ザールでは、「私」とは、いくつもの矛盾する人格が寄り集まってできているものととらえる。その中には「スーダン人」のように、自分ではコントロールできないものもふくまれている。それらもふくめて、「私」という存在がある。「私」とは複数の人格からなる一つの社会なのである。このような考え方は、エジプトだけでなく世界じゅうの伝統的な社会に広く見られるものだ。

複数の人格の中には、よからぬことをする者もいる。それもまた「私」の一部であるのととらえ、ご機嫌をとってやることで対処する。「悪」といっても、存在してはならないわけではない。

これに対して「コントロールできないものは〈私〉ではない、それは悪である」として追い出そうとするのがキリスト教の悪魔祓いだ。これは西洋近代の個人主義の考え方とつながる。個人主義は、「私」を一貫性のある単一の人格としてとらえようとする。「私」の一貫性をそこなうものは「私」ではないとして、排除しようとする。

ザールの参加者の多くは中高年の女性である。その女性たちがザールの場では、タバコを吸ったり、イスラームの教えでいつも頭部

を覆^おっているヒジャーブをかなぐり捨てたり、踊り狂^{くる}ったり、大声を上げて泣き叫^なんだりする。それはおそらく彼女^{かのじよ}たちが家庭の日常では見せない姿だろう。

家庭での彼女たちの「私」は、主婦であつたり、母であつたり、妻であつたりという家庭で求められる役割によつて規定されている。でも「私」の中には、母でもなく、妻でもなく、主婦でもない「私」もあるだろう。そうした存在が居場所を失^ない、鬱屈^{※うつくつ}した感情として溜^たまっていた、彼女たちの中で悪霊に成長していくのかもしれない。

悪霊ははじめから悪霊だったわけではない。「私」が、まわりの他者との関係においてつくられるように、「悪霊」もまた「私」の中の複数の人格との関係によつてつくられていく。現実の社会の中で、底辺に追いやられ、居場所をなくし、声を上げることもゆるされない人たちが、ときには反社会的な存在となつてしまふように、自分という社会の中で居場所と声を奪^{うば}われた人格が悪霊となつていく。

社会に生きているかぎり、ふだんの私たちは社会的に承認されやすいアイデンティティを「私」として生きている。しかし、その「私」の奥^{おく}には、べつの「私」がいくつも隠^{かく}れているかもしれない。いま暮らしている社会や人間関係の中では、それらの「私」は悪霊と見なされてしまふかもしれない。

その悪霊にならかけた「私」が失敗したり、他人に迷惑^{めいわく}をかけたりすると、私たちは自分を責めたり、自己否定したりしがちだ。自分が複数の小さな「私」から成ることを忘れ、「やっぱり自分はだめなんだ」とか「自分がイヤになる」などと、自分につらくあたつてしまふ。

しかし、悪霊にならかけている「私」もまた自分を成り立たせている大切な一部にほかならない。連帯責任をとるように「私なんてだめだ」と自分をまるごと断罪したくなるのをこらえて、^E悪霊にならかけている「私」を「大切な友だち」だと考えてみては、どうだろう。

大切な友だちであれば、失敗したからといって、あなたは責めたてないだろう。迷惑をかけられたからといって仲間はずれにしたりしないだろう。疲^{つか}れているときには見守り、つらそうなときにはやさしい言葉をかけてあげるだろう。

悪霊になりかけている「私」とは、大切な友だちが困っているようなものだ。その友だちを気づかうように、その思いに耳をかたむける。「自分にやさしくする」とは、そういうことではないだろうか。

生きているかぎり、「私」は「私」から逃^{のが}れることはできない。「私」の中の小さな私たちを悪霊にしてしまわないために、彼^{かれ}らが声を上げ、憩^ひうことのできる居場所をつくる。そんな自分とのつきあい方を、ぼくはザールから学んだ気がする。自分の中のたくさんの私とほどよくつきあうことができるようになると、おのずとほかの人びとも、ほどよい距離感^{きょり}でつきあえるようになるものなのだ。

〈田中真知『シリーズ「あいだで考える」 風をとおすレッスン 人と人のあいだ』(創元社)より〉

〔語注〕

※ワークショップ……参加者が主体となる体験型のイベントや講座のこと。

※畏怖^{いふ}……おそれこわがること。

※象徴^{しょうちよう}……言葉で説明しにくいことがらや感じ・考えを具体的なものであらわすこと。

※鬱屈^{うつくつ}……気分が晴れ晴れしないこと。心がふさぐこと。

問一

1 3 にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア しかし イ だから ウ たとえば エ やがて

問二

A 私たちは多様な他者との関係の中で、そのときどきに応じて、さまざまなアイデンティティをもちながら生きている。とありますが、たとえば「読書家である」という「アイデンティティ」はどのようなことを通して成立するでしょうか。筆者が挙げている条件を二つふまえながら、具体的に説明しなさい。

問三

B 「認められたい」という思いが先に立って、それに合わせたキャラに徹したり、嫌われないような役割ばかりを演じたりしていると、そのアイデンティティにとらわれすぎて、自分が本当はどうありたいのか、本当はなにを大切にしたいのかを見失ってしまうとありますが、こういった状況を「本末転倒^{ほんまつてんどう}」と呼びます。「本末転倒」とは「重要なこと（本）と、つまらないこと（末）が反対になる」という意味です。この場合の「本」と「末」とはどのようなことですか。それぞれ二十字以内でまとめなさい。

問四

C

D

ザールと呼ばれる悪霊祓い、キリスト教の悪魔祓い、について、愛子さんは次のようにノートにまとめました。
二つの儀式を比較するために、儀式の様子や背景にある考え方などについて整理しました。これについて、あとの(1)～(3)に答えなさい。

【愛子さんのノート】

	Cザールと呼ばれる悪霊祓い	Dキリスト教の悪魔祓い
「悪霊」・「悪魔」の扱い方	「悪霊」を追い払うのではなく、 a。	「悪魔」を追い出そうとする。
同じような考え方を する社会	エジプトだけではなく世界じゅうの 伝統的な社会の考え方	西洋近代の個人主義の考え方
「私」の中の、「コントロール できないもの」に対する考え方 やふるまい	自分ではコントロールできないものを b。	自分ではコントロールできないものを c。
「私」という人格の とらえかた	「私」は d からできている と考える。	「私」は e であると考ええる。

(1) a にあてはまる言葉を六字以内で答えなさい。

(2) b に入る内容を十字程度で答えなさい。

(3) d に入る内容を「人格」という言葉を使って十字程度で答えなさい。

問五

E 「悪霊になりかけている」「私」を「大切な友だち」だと考えてみては、どうだろう。 についてあなたの身におきかえて考え、次の

(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「悪霊になりかけている『私』」とは、あなた自身にとってはどのような「私」ですか。あなたの日常生活をふりかえって具体的に答えなさい。

(2) (1)で答えた「私」を、「『大切な友だち』」だと考える」とは、具体的にどうすることだとあなたは考えますか。答えなさい。

問六

本文における筆者の主張としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から承認しやうにんされやすい「私」と、承認されにくい「私」は、他者との関係によっておのずとうまく距離感きよりを保てるようになる。
イ 自分の中の、悪さをしたり失敗したりする「私」としっかり向き合い反省することにより「私」を作っていくことになる。
ウ 自分の中の、ちょっと困った「私」や嫌いやな「私」を大切にしていけることが他者と上手に関係をきずくことへとつながっていく。
エ 周囲から承認されやすいアイデンティティを「私」と思って生きているため、他者の存在は欠くことのできない大切なものだ。
オ 周囲から承認されやすい「私」の奥おくにある別の「私」こそ本当の私なのだから、隠かくれている「私」こそ大切にしなければならぬ。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

母親に有名校の受験をすすめられ塾^{じゅく}の夏期講習に通う「奏太^{そうた}」は、夏休みの宿題の風景画を描^かいていたとき、ジャグリング（玉や輪、ナイフなどを巧^{たく}みに投げたり受けたりする曲芸）の練習をしている大学生の「セナさん」と出会う。ジャグリングの指導を受けるにつれて「セナさん」に好意を寄せるようになっていた「奏太」は、次第に親の言う通りになっている自らの進路について疑問を抱^{いだ}く。「奏太」の思いを聞いた「セナさん」は「連れていきたい場所がある」と「奏太」を誘^{さそ}い、「奏太」は塾をはじめてサボり、「セナさん」と行動をとにもすることになった。「セナさん」が「奏太」を連れていったのは、母親がすすめる有名校であった。

「I」

高校の校舎は明るく清潔な雰^{ふん}囲^い気で、部活の全国大会出場を祝う大きな垂れ幕が、屋上からいくつも垂れさがっていた。もつと監獄^{かんごく}めいた場所を想像していたほくは、イメージとの違^{ちが}いにすっかり言葉をなくしてしまっていた。

だけど、驚^{おどろ}くのはまだ早かった。きよろきよろしながらセナさんの後ろをついていくと、校舎裏のスペースで、二十人ほどの高校生の集団がジャグリングの練習をしていたのだ。しかも高校生たちは、セナさんの姿に気がつく、「姉御^{あねこ}！」「ボス！」「セナ先輩^{せんぱい}！」と口々に声をあげて、いっせいにセナさんのもとに駆けよってきた。

「よう、はじめにやってるな。夏休み中なのに欠席者ゼロとは感心感心」

「そりゃ姉御^{あねこ}がくるってんだからあたりまえっすよ。それで、こっちの子が体験練習をさせたいっていう中学生っすか？」

セナさんに似た短髪^{たんぱつ}の女子高生が、ふいにほくのほうを見た。ほくがびくっと縮こまってしまうと、セナさんがこっちを振りかえって苦笑^{くしやう}した。

「そんなびびるなつて。こいつらはあたしの後輩^{こうはい}だよ。ジャグリング同好会の後輩」

そこまで説明されれば、もう 答^Aえはひとつしかないようなもののに、ほくはまだ混乱していた。ジャグリング一筋^{ひとすじ}という印象のセナさんと、県内トップの進学校が、頭の中でうまく結びつかなかった。

そんなほくの様子をながめて、セナさんは愉快^{ゆかい}そうに言った。

「ここ、あたしの母校」

ジャグリング同好会の体験練習では、これまで使ったことのない道具をいろいろさわらせてもらった。ボーリングのピンみたいなクラブ、鼓のような形のコマを両手で張った糸で飛ばすディアボロ、三個の長方形の箱を自在にあやつるシガーボックス。どれもはじめて挑戦するものばかりで、ぼくは練習のあいだずっと、わくわくしっぱなしだった。

体験練習のあとには、校内の案内もくわしくもらった。昼食は練習後によく寄るというラーメン屋でごちそうになって、高校生活の話もたくさん聞いて、そしてまた夕方になるまで、いっしょにジャグリングの練習をさせてもらってから、セナさんとぼくは高校をあとにした。

帰りの電車はまたがらがらだった。行きるときと同じようにボックス席に座って、ぼくは向かいのセナさんの顔を、それとなく見つめていた。

へ 中 略 へ

「あたしの印象って、おまえあれだろ、あたしのこと絶対脳筋の体育会系だと思ってたんだろ」

「ちっ、違いますよ。ますます尊敬の念が強まったって意味で……」

ぼくが慌ててこたえると、セナさんはぶっ、とふきだして、「尊敬とか面と向かってさらっと言うか普通」と笑った。ぼくもつられて笑うふりをしながら、寂しさを悟られないようにした。

こんなふうに寂しくなるのは、心のどこかで思っていたからなのかもしれない。ぼくもセナさんのようになりたい。セナさんに近づきたい、と。だけどもいまはもう、とてもそんなふうには思えなかった。

県内トップの高校から、優秀な大学に進学して、同好会の後輩たちからもあんなに慕われて、もちろんジャグリングの腕前も誰にも負けないほどで。そんなセナさんはすごすぎてまぶしすぎて、ぼくはもう憧れて尊敬することしかできなくなってしまったような気がしていた。

電車のボックス席の、ひざとひざがぶつかりそうな距離は、行きるときと変わらないはずなのに、ぼくは ^B まるで「＊」のように、セナさんの照れくさそうな笑顔を見ていた。

Ⅱ

「奏太、今日はどこに行ってたの」

「どこって、夏期講習だけど……」

「嘘をつきなさい！」

母さんが **1** 多くの言葉をはねのけた。思わず肩を震わせたばかりに、母さんはかろうじて冷静さを保っているような声で、「塾から連絡があったのよ。奏太が夏期講習にきてないって」と続けた。

「それだけじゃないわ。講習のあと、自習室で宿題をしてくるっていう話も嘘だったのね。塾の先生に聞いたら、奏太が自習室にいるところは見たことがないって言ってたわ。あなた、そうやってずっと母さんをだましてたのね。母さんの信頼を裏切ったのね」

多くの胸を何度も突き刺すように言葉を重ねてから、母さんは「今日はどこに行ってたの」と最初の質問をくりかえした。自分は自分の爪先を見つめたまま、高校の見学に、と正直にこたえた。セナさんに誘われたことは黙っていた。話せばどんな迷惑がかかるかわからなかった。

母さんは多くの話を信じようとはせず、ほんとうのことを言いなさいと、ひたすら自分を責めた。こうなってしまったら、もうなにを言っても母さんの神経を逆撫でするだけだ。多くはただ黙ってうなだれて、母さんの怒りがおさまるのを待った。

このぶんどと、明日からはもう、セナさんにジャグリングを教わりにいくことはできないだろうな。母さんの剣幕を見て、自然とそう悟ってしまったから、多くはそのことを受け入れかけている自分をなじった。どうしてもあきらめようとしているんだ。セナさんは明日も自分を待ってくれているのに、このまま会いにいけなくなっていくわけないだろ。

※
いつまで黙っていてはだめだ。まずはなんとかして母さんの怒りをしずめないと。そう思っただけでも、なかなか言葉を発することができないでいると、母さんが多くに命令した。

「カバンの中を見せなさい」

「な、なんで……」

「あなたが今日なにをしていたのか、たしかめるのよ」

多くに止める間も与えず、母さんは乱暴にカバンのチャックを開けた。そして【C】をひそめて、荷物のいちばん上に載っていた

黄色いボールをつかみあげる。

「なに、これは」

「……ジャグリングのボールだけど」

「まさか、こんなもので遊んでいたの？　こんなもののために母さんに嘘をついて、大事な夏期講習をサボったりしたの？　あなたいったいなにを考えてるのよ。あなたの学力は、あなたの志望校にはまだまだ全然足りないのよ。こんな無駄なことをしてる暇がないのはわかってるでしょう、ねえ」

悲鳴じみたその言葉の途中で、ぼくははっと顔を上げた。途端に厳しい視線に射すくめられて、目をそらしてしまいがちながらも、ぼくは勇気を振りしぼって言った。

「D……ジャグリングは、無駄なことなんかじゃないよ」

「どこがどう無駄じゃないっていうの！」

即座にそう返されて、ぼくは言葉に詰まった。わかってる、母さんが望んでいるぼくの将来に、ジャグリングなんて無駄でしかないことは。だけど、ぼくにとってはそうじゃない。

セナさんと出会って、ジャグリングを始めて、ぼくはちょっとだけ変わったような気がしていた。練習を重ねて、上手にボールをあやつれるようになるにつれて、自慢できることなんてなにもなかった自分に、ちょっとだけ自信が持てた気がしていた。そしてなによりも、セナさんといっしょにすごした時間を、無駄だなんて認めたくなかった。そう、絶対に、絶対に無駄なんかじゃない。

「とにかく、ボールを全部よこしなさい」

有無を言わせぬ口調で母さんが言った。ぼくがその命令に従おうとしないと、母さんはぼくのカバンに手を突っこんで、強引に残りのボールを奪おうとした。

その瞬間、頭が **2** 熱くなった。ぼくは反射的に母さんの手を振り払うと、もう片方の手にあるボールをつかんで、「返してよ」と言った。自分のものではないような強い声が出た。

「やめなさい！　わたしは、母さんは奏太のためを思ってる……」

「返してよ」

ぼくは母さんの手から力まかせにボールをもぎとった。母さんが反動で後ろによろめいて、背中を壁にぶつけ、近くに掛けてあったドライフラワーのリースが **3** 床に落ちた。

気づくとぼくの心臓は、全力疾走の直後のように激しく鳴っていた。ぼくは呆然としている母さんを廊下に残して、自分の部屋に逃げこんだ。それからしばらくドアノブを握って警戒をしていたけど、激怒した母さんが部屋に押し入ってくることはなかった。

昂った気持ちをしずめようと、静かに呼吸をくりかえしながら、ぼくは手の中のボールを見おろした。母さんに逆らったことを後悔する気持ちは不思議となかった。むしろこのボールを取りもどせたことを、ぼくは誇らしく感じていた。

大きく息を吐いて目を閉じると、まぶたの裏にセナさんの凛々しい笑顔が浮かんできた。

明日もまた、セナさんに会いにいこう。セナさんからもらったボールをそっと握りしめて、僕はそう心に決めた。

翌朝になっても、母さんはぼくと口をきこうとはしなかった。ぼくも母さんの不機嫌な顔を見るのが嫌で、できるだけ接触を避けていた。

まったく言葉を交わさないまま、夏期講習に出かける時間になって、ぼくは家を出ようとした。だけどその直前で、ぼくは思いきって玄関から引きかえすと、洗いものをしていた母さんの背中に向かって言った。

「昨日は、ごめん」

母さんの返事はなかった。こちらを拒絶するような沈黙に怯んでしまいそうになったけど、ぼくはきつぱりと告げた。

「もう塾をサポートしないよ。宿題もちゃんとやる。昨日、実際に見学して、あそこの高校に行きたいって本気で思ったんだ。合格できるように、勉強もこれまでより頑張るつもり。だけどジャグリングも、続けたっていいでしょう？」

母さんの返事はなかった。しばらくそこで待ってから、ぼくはあきらめて玄関に向かおうとした。けれどそのとき、母さんがふいに、「奏太」とぼくの名前を呼んだ。驚いて振りかえると、母さんはこちらに背を向けたまま短く言った。

「E
いってらっしゃい」

「……いってきます」

たぶんまだ当分は、母さんの機嫌が直ることはないだろう。それでもぼくはいつもよりずっと軽やかな気分ですぐ夏期講習に出かけた。

〔語注〕

※監獄^{かんごく}……………刑の言い渡しを受けた者などを収容する施設。

※脳筋^{のうきん}……………筋肉^{きんにく}ばかり発達して頭脳^{ずのう}の活動は二の次という意味合いの言葉。

※いつまで……………いつまでも　のことだと考えられる。

問一

1

3

にあってはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア カット イ ムツと ウ ぴしゃりと エ ぱざりと オ さらりと

問二

A

答えはひとつ とありますが、ここでいう「答え」の内容としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 県内トップの進学校の校舎が、想像していた監獄^{かんごく}のような場所ではなかったこと。
イ 県内トップの進学校に、ジャグリング部が存在していたこと。
ウ 県内トップの進学校で、ジャグリングの練習をしていた部員がセナさんの弟子だったこと。
エ 県内トップの進学校を、セナさんが卒業していたこと。
オ 県内トップの進学校の生徒が、学習よりも運動を優先していたこと。

問三

(1) B まるで「＊」のようにの「＊」にあてはまる表現としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 山頂から見える景色を見下ろす
- イ 目の前に広がる大海原を見渡す
- ウ 隠しておいた秘宝を間近で観察する
- エ 観客席から遠くのステージをながめる
- オ 高く昇った太陽を目を細めながら見上げる

(2) (1)のような「まるで～ように」という形で表される表現技法を何といいますか。もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 倒置法とうちほう
- イ 擬人法ぎじんほう
- ウ 反復法
- エ 直喩ちよくう
- オ 隠喩いんう

問四

「C」にあてはまる体の一部を表す言葉をひらがなで書きなさい。

問五

D ……ジャグリングは、無駄なことなんかじゃないよとありますが、奏太がこのように考えるのはなぜですか。その理由を五十字程度で書きなさい。

[illegible]

いってらっしゃい
の言葉から読み取れる「母さん」の心情を説明しなさい。

次の文は、「Ⅱ」の場面における「秦太」の内面的変化について、生徒たちが話し合っている会話文です。このうち、本文の内容と照らしてふさわしくない発言をしている人物を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

生徒AⅡはつきり母親にものを言えずにいた奏太だから、最初は母親に嘘を言^{うそ}ってしまっていたね。

生徒BⅡでも、ジャグリングを否定されたことをきっかけに勇気を出して母親に言い返していたじゃない。大したものだよ。

生徒C「心臓が全力疾走の直後のように」鳴っていたところから、ボールを取り返した直後の奏太自身の動揺も読み取れるね。

生徒Dは翌朝には、せつしょく接触を避けようとしていた母親にも、しつかり向き合うことができたよね。

才生徒E「最後は、「軽やかな気分」とあるね。母親の機嫌きげんに全く構わず、自分の意志を貫つらぬいていく奏太の今後が暗示されているね。

国語の問題はこれで終わります。

